



遠近
1317
6



門へ 13
番 1347
巻 6

無飽三文圖會卷第三目錄



外夷之部

別世界之圖 并説

手の多有國 悪鬼國

腹のない國 腹を賣國

脚の長い國

目のない國 口車の圖

親の目を盗む國

手の無國 新造子

手の長い國

爪の長い國

福島

腰のない國

親方の足をかちる國



頭よ血の多い國 くちまを
 舌の二牧ある國 まぎら 野狐落 やこらく
 憲人島 ひとト島 八丈島 やぶ 島の圖
 尻一午の回りぬ國 しりて
 角のそへくる國

口のみ先一生る國 くち
 大人國 おとな 狂哥世界 きやうか
 年一本の國 とし
 火のふる國 ひ 兵赤梅檀の圖 へい

一大戲場樂屋話 てんちも
 全部九冊

此書は世間の人情をさか
 此を穿ち勸善懲惡を
 界の樂屋をみる
 近刻

別世界之圖說 べつせう

○日輪南より出る國 這國夜を貴んぐ盡を賤む大概目
 見は文花いさぐ蘭さる國なり古来商賣往來一部を得て
 夫さ九ぐい不記せのさの茶の湯を倣く這國第一の技け
 いとちい人間の道あると鮮く借錢の測りもと多し其俗
 都く不器者あり。醉國は屬し男子一人も醉を知に
 尋常の中飯ごろは朝飯をふ是即日の南より出る國なり
 夫天地英靈之氣不鍾於男子而鍾於婦人とい彼謝孟稀が
 發憤言はれ這國は篇文と欲に都く是より那屬國を夫年



糸の長い国

舟の長い国

穀の目を盛む国

女がうつくしき国

こいの長い国

口車
のつ
むち
行
圖

石
を
な
る
る
る

脚の長い国

目の南より出る国

馬鹿国

七つを愛する国

新造子



人物
この
国
に
至
る
に
至
る

人のかたの
肌と液を
着る
着る



教方の足を踏む国

七の長い国



三十一

○千のなき國新造子。又ウツソリ國人物年なく一丸く風土かへつこよ一

○千の澤山有國即是人間の行路難らるひの咄邦の天狗風又まきの風吹のたされこ其身の浮雲の空に飄ひ復未とげぬ誓言の吾而已志づむ奈落の底怨龍惡鬼は其身を責られ終は這國の樂しらげ人の體の臆と腋をまろく育つ惡鬼國されば此世界に在る者其風土を志とさればミイラ採のミイラに成り麻逐獵師ハ吾らもあづ落一穴へ陥るべ一

○千の長以國へ離れ人間界外は有何取と取定の所と何方の店も一人位へ這國の人居なるべ一竿のさねある視あり二階の千簞子の紙烟草。あまよのせざる釵まぐいと千の長さ者らろろ。尤結びんつけ嫌ひなく當りといひつらける。餘りよるば屑が出るべ一人のあまぬと思ふもあつし。慎みよ此千のゆゑ一寸作者の好意なり
○腹のない國或ハ千のない國は屬し又千の有國は屬し腹のない國かへつこ腹らり。誰れなき腹らる國ハ千のたんと有國は屬し。是かへつこ腹なき國自身の

腹を賣國あり價を擇んぐ腹をうる。高クツのその
ちりきを幾許人よろるよ至つてへ腹なると知(さ)而巳中
ふ一人へ買人けん夫さ今ハ成行めく。腹買くとて當
よへならぬ腹まうしてどふしたナア。跡ハ野となれ山ざら其ハ
時くの腹賣又嘘も實も別段も變つと仕うけ有(り)あ
ま是(れ)が當世流行めく。花柳世界の惣づれ亦風月場の
負よごし。人情自然の男女の情さ過半ハらんをもの
とをなれり。

此の川の長さ國彼仙人の麻姑姐つめへ自身の持ま(り)あく。

孫手のかまりよもあぶ此の川の長さ國は飛鳥川ありてその
瀬瀬かり安く滄海たちもち己が股ぐ圃となりてを
たけく渡は麻姑仙女の赤葉多し
○足の長さ國即ち是長客國なり。尻の長さ國これが屬國
たり這足長國を見子坐(り)ともお圃も長し。雪隠もな
めく酔語も長し。ぶん流しの流れは添(り)く。カルトイを
等其屬國なり

○福島又福つん蛮名「カ子カシヤ」鳥の名と思ふべし。カ子カシヤ
等隣國なり或ハを股も尻を延(び)る國

人有り。國産ハ馬と麻と多し

○女子目のない國近來西蛮の説をきくよ女子眼有り
男へ却つて眼なしといふ。遠國の人変りて目前まで
常に口車よのつて肌の雪の上まぶりて深み町へ

をあると多しといふ

○腰のない國是五臟六腑の不足したる國なり但し膽を
しといふ。其音聲めりたりなく。膽を菜種の花たは
咲まり。猫が火のいゝる曳りて。這國の人常に石橋をた
のく渡る。まぶら立引といふとなく袖のうす手を出てを

頭は血の多い國



無茶國

智恵梨子の木

古の二つの有國



國名 野狐落

小人島

又意人島といふ



起請の牛王鳥



穴先(生)國



穴先(生)國

圖

嫌ふとのり。臘燭の立は驚き。常はざしきの者。直赤
をいれる。獸の狼狽多く。故にいつとも人の尻うり行く。
地方アングラ國は近し。生涯面白きことをまじふとふ。
國中一種の信天翁を居し。

○親の眼玉を盗む國。這國人夜寐とまひ蒲團の中ふと
んをまがごめ我身にかつて星を犯し。足を空うりて
月を踏む。有項天はかけ何がる。親の何んどの苦くなきは。
片手は親の目玉をぬく。親はさねど子にさけぬ酒とま
さけは身をたぶらぬ。親の眼の黒ひうち嗚呼つ

めや此迷ひ。這國の産物うれ鳥の一夜づけ。子を思
ふ夜の霍常は空なく風まき。異見のうんと鳴く。燒
野の雉子何んの上をむ却る。比翼紋のひやくの鳥
常は身をたまれはと云

親方の足をかぢる國。其風土人物眼をぬく國と異
なることなり。唯這國人をさへ冷飯を食或は石を
をらめ。頭を土へつこむ。又手長島の属國なり。
○頭は血の多し國。這國へつて喰ん氷界より常
常帝閻の無闇なり。國人勝吏を榮とて負ふことを

耻ちぢとし其その果實くわいじつハギンナレと智惠ちゑ梨子りし茶ちのなき國くにハ
 魚うし茶國ちやぐくになり。又大おほ南京なんきんをつてく獸けものハ猪いのししもつとも其そのハ
 國くにの知し多おほし。又また倭銀わがぎんつぶを出出い出い出い
 〇口くちの先さき産うる國くに常とこ言ことの葉草くさ風かぜさたがりく国人くにびと
 又またよく人ひとの願ねがひをとき。腹をよぢよん。然れども是これ外ぐわい料りょうハ
 あらび。慮外りよなとも可を笑わらひ。なに都く。這國このくに山やま栗りの
 落おちととり。風かぜ吹ふり。秋の山栗やまのりの毬まりの笑わらひ。せ川がは又また愛あいあり
 海うみ辺べも。洒落しやれ貝かいの貝かいも。上國じやうくにとなに其物もの産うハ笑わら
 草くさ夏なつ忘わす草くさと茶多ちや多ちや。其その鳥とりハ滑すべ魯ろ鳥とりよく藝げい子しのひよ
 三三ノ七

こを生そ立だ陽やうハ南なん草くさをうる。都みやこく。位をいま。新し。さを
 賞しょう翫くわんる。這國このくにの木草くさ魚うし介けいも。毒よも葉くさ子しもあらび。
 是これ這このくに上じやう國くになり其その下げ國くにハ。洒落しやれ貝かいの甲こう斐はいもなく
 笑わら草くさハ味あじ苦くく。冷笑ひやめい草くさといふ。茶子し似にく。茶子し何なにぢ。
 言ことの葉草くさハ皆みな母はは何なにり。國人くにびと一ひと向むか蘇その山やまハ。いや。な穴あなをさがして
 狐きつねつりを第一だい番ばんの葉くさといふ。無性むせうハ鉄てつ炮ぱうを放し。まるん
 皮かわ肉にくを取つ。うひ。又嘘うその皮かわを高賣うとなにてや。日本にっぽんの
 屠と兒ごのどく。這屬しゆく國くにも。至つ。くの下國げくになり風かぜ土ど甚しんど
 小よう。ぶ慾よくの熊くま鷹たう王わうの爪つめホ。その産さん物ぶつも。亦多たく

悪玉を出し鼻の先は渦をまきまき。その股の智慧を賣
とくど山性ハアレダラ國の分國より人いも「ヨハリヤ」
屬も這國の風景まきまき。教風景也といふ其風至る寒し
舌の二牧りる國。近來這國の勢をなご盛人よして世界
過半這國の風となる本國ハ「ベカカヤ」せりその里其本城也
人を「ケウ」といひ泣を「メワカ」といふ真劍の蛮語といろ
更のとを「ミンナン」といふ日本の恋の字はあはる多くつめ
く「ミヤ」といふ「ミン子ロクニ子イ」といふ這國の隠言なり。
本國の人その舌何牧るを知れ其獸ハ狐狸いぬ猫いこち

の義理まきまき多し。温大雅傳禁中野狐落の字は作者
ひ移つる。這國を野狐落といふ
大人國まきまき大盡のろつけ。前篇より引抜れり。大人國
の原赤道の南より。蛮名たり「メカラカ」文華いまご
關する國なり。是はけつろく左様を理屋の有とよ非は
狂歌世界とこつけける也。花柳世界より甚遠方なりと
いども火夏と滑稽ハ遠ひがよ。北赤道の南より
まきまき。自身より道理をつける國人狂哥を嗜む文花
辭けり。辭けなんごりまる國なり。國人屁をうご悦び何

とも無^まこを好^{この}む也又好^{この}む^{ろん}糶^わを^らる^るひ國中^{ちゆうちゆう}とんと山^{さん}を^も。
 唯^{ただ}文^{もん}盲^{めう}國^{こく}又^{また}花^{はな}柳^{りゆう}世界^{せかい}を^ま来^きつゝ物^{もの}を^け汚^がれ^を以^{もつ}て山^{さん}と^は。
 阿^ある^るひ^ひ似^に山^{さん}多^たしと^つみ^ま至^{いた}つ^つ不^ふ用^{よう}の^と土^ち地^ちな^り只^{ただ}板^{いた}木^{ぼく}屋^やの^を。
 屎^しを^いど^ど然^{ぜん}れども是^{これ}を^上國^{こく}と^なれ^ば其^{その}余^よハ^し生^{せい}涯^{えい}苦^く勞^{らう}の^を。
 爲^な損^{そん}を^なれ^ば一^{いつ}種^{しゆ}の^こ國^{こく}風^{ふう}年^{ねん}の^う上^うの^をを^たら^る國^{こく}人^{にん}ハ^亦賞^{しょう}を^ま。
 る^よ足^たる^る唯^{ただ}下^かの^り年^{ねん}の^ま生^{せい}る^る國^{こく}人^{にん}多^たし^し蛮^{まん}名^{めい}「^カカ^ラ之^の力^{りき}」。
 今^{いま}「^カカ^ラ之^の力^{りき}」多^たし^しと^らふ^ふ。
 小人^{こじん}鳥^と島^{しま}。コ^コビ^ビト^トと^よむ^むハ^た誤^ごり^も也^{なり}恋^{こひ}人^{にん}鳥^と島^{しま}なり^{なり}遠^{とほ}島^{しま}と^こ恋^{こひ}。
 人^{ひと}の^かさ^さあ^あつ^つ住^{ぢゆう}ま^るる^る所^{ところ}也^{なり}斯^{かく}り^り起^き請^{せい}の^ご午^ご王^{わう}鳥^と島^{しま}お^ほく。
 三三ノ九



腕うでまは布ぬいりし文身ぶんしん國こく亦またその屬國ぞくこくなり。大標おほひら廿五にじゅうご歳さいを限りと
なす。近來きんらいたるは長命ちやうめい多おほし。人氣じんぎ浮華うきか多おほし。嘘うそか
そよたゞ誠まことも定めごとし。所謂いひゆる女護にょご島しまこれなり。お
てんを多おほく故ゆゑは天馬てんま將軍しやうじんの官くわんあり。都みやこは節季せうきの合戦あひび
け取とりののけりお祢ねまの陣ぢんどり。水上すゐづかみの先さきがけ皆みな女令にょれいを下くだ
す此島このしまの權柄けんぺいことごとく女をんなは帰かへり男をとこはと人と問まは合あは
男をとこ坐ましし出いづし其國そのくに寒をさむ。真劍まけんの女護にょご島しまのごし。
牝鷄ひんけいの晨あけ約束やくそくの夕ゆふ。外國がくこくの男子をとこ。若わはまらるまる此國このくには
時ときハ風流ふうりゆう罪過ざいごの責道せめだう具ぐまらるまる下のしたの柵せき柵せきのつらみ付つけし

械けいは身みハこれ情なさけの縛なり。心こゝろは恋こひは囚とらへ。亦またいふ人ひととも成なり。嘘うそと誠まことの岐路ぎろをわく。迷まよふも更さらは無理むりなれば千年せんねんさた々
白絲しろいとの染ぞめるを歎なげく唐人てんじんハ思おもへ扱さくをそ臭くさし。夫それごころハ
衣裳いしやうの色揚いろあがりとも。幾回いくさげも変かり情なさけハ線香せんかうの消きつくとそよ
あつとつと。皆みな亦また灰かへとまらるまる天人てんじん歌うた舞まい人間にんげんの極樂ごくらく土ど惡あく
鬼夜行おにやぎやうハ紅粉べにふんの地獄ぢごく界かいむふのお釜かまの者ものとなり。真まま
地獄ぢごくの釜かまのこげ。本年このとし二十五にじゅうご菩薩ぼさつは又また切きり。三世さんぜの諸佛しよぶつ
彌陀みだの毫光ごうかうのかんざし。曝ひりかやく彌陀みだの淨土じやうど。假かり
名な手本てほん七ツ目しちつめを比翼ひよくまつけ。悦よろこむ。嗚呼ああ人間にんげんの快活くわいかつ場ば

夫れぬい馬鹿う賢いのを彼色界の鏡鬼外道とくも佛の
 微妙の聲音拈花微笑の花のまゝひの聞かすも見ざる
 べし。振れと夜さの一夜も九年只面壁の瘦我慢けちな
 悟をひらくより面白く迷ふのが亦當世の流行なるべし
 ○千一本の國半身國の屬國二人抱け行く行國也行の行
 袖いふとつの一ツ夜着又かいまきの其中二人ものつと
 何ふ是千一本の國なるべしや此國のたのしみはつと大むの
 恋人島は似たり方角定めごとく蒲團の嶋の八丈あり又
 ハ更紗のおらんと辺浦ハ淺黄の朝雲は只逢ふたとつめり

し跡の此糸ちぶく紗綾もゆる蝦夷や錦の翠帳紅国唐も
 倭も一ツ町よせく見せざる萬國全圖の二世かくる三世相山
 海経は考ふるは地方たるごとく人間は遠くと雖かよへ人の彼
 よく歩く馬脚國千里も一里あつても又何まぐ戻れば又千里
 千里つらうと相おれのとどの詰りへどふなさる其樹の連理
 又相思草その鳥の比翼の鳥と外鳥央鳥翡翠鳥相思鳥獸の
 駱駝を舟としたり或去この國もと其千の二本つたり古来
 千一本邪魔はなるともり
 ○尻(千のまつぬ國此く人の鼻下なぐり千のまぢりき國

よししく自身を尻ふくとならぬ早晩とも人のちふふ成るを
年のみき國は属に或ハ耳とつゝ鼻をりむ長耳國は襲
うされ唯うろくと野路馬よのつて壁は馬をのり駈たがり
一文をりこの百ちよば這國一文の錢を貴ぶ金の貴をし
らぬ故は百の口三十九文ぬけりといふ是省陌の法行る
國なり省百の法ハ淵鑑類函ハ安祿山百の口四文拔て官
納ませしとを載又帰田録ハ愷ハ五代の頃まごよ百の口
三十三文拔法ありと思ふ省陌といふは子ども分は亦
作者洒落まつまつく学文の尾を出まをり扱這國仏教

いまど流布なきば得る四の字を嫌ひく諸吏生徒は之
るし彼東方朔が彭祖の不洒落鼻の下三尺むら亦是涎
三千丈その鼻毛くぞへす一這國常はひきちう荊萱多く
又獨活の大木をいひばレヤボテレケレボナレヤヤレヤ其
産物なり國人常は人の手を喰ひ又渾く味噌を付
て食まといふ花柳界の本國ベカハカチヤレハ深く屈伏謹
しんふ貢を納め奉公よなる國なり尤膏腴だいの
地となに
○火の降る國這國人もと花柳界色里の合戦は背地し

酔の川へ逐こまれ蓬くも背をよせ這國へまげとりたる也。
而来あり。常は怪しき法を行ひ節季のいつもどろくを
つゝ折し目く火をいどに上下出入の戦ひたに得世至
つゝ騒しき国も風土も亦大熱國なり曰く這國
人何つげよ取るく多し其本城を「スカレヒ」といふ國中は
赤梅檀の樹もよよ生茂る國人勉まかり松ふとどども
更まつまじ就この赤梅檀を以て横もゆる仏をつくる。これ
耆婆も手ををるく湿繁の像なり羅漢薩陀犬猫鼯
鼠とぐく愁傷をなげ便これ取まのく泣くをいひ力を

落は体なり。或は偶く掛取の古鬼借がりの怨霊此像を
看く。無常を觀し悟をつけ。擧るなく往生の本意を
遂るといふ。這國もと屍の年のもよめ國に属は
○角の生るる國鬼をもむ國もく々怪鬼國なり口の何とりの
血の色ハ紅の餘波と忽ち喰つく。睥ちと愚痴は氣をま
つに。嗔恚の火をこそろく。熱き涙の雨なり。片午に取
くむなきさうの胸もさくく。嫉妬の劍山も崩るく声なりま
神のおられう山の神男の倒るく執見よとれし心をまら成し
又ハ花柳の世界も鬼夜泣夜又の国思つぬ人も二つを

二道かぐる契りよハ悟氣の角のつつの文字もは恋この思案しあんの外げ
道夜どうや又鬼神おにも横道よこみちなきなるべし。此鬼このおにおほく人の腕うでと唇くちびる
みくひつく。又魅人まにひとの塊かたまりを棄すひ膽いでをまけ皆みな是こゝろ魂膽こんたんを
食物しょくぶつとなす也なり

幻花情史著

無飽三丈圖會三篇 全三冊近刻

四篇五篇嗣出

魚飽三丈圖會三之卷大尾

跋

算目

鮫網ハ傳つたへして小魚せうぎよの腕うでを念おもひて霍つれをり
あき如ごとく片かたををりあき片かたをり一ひと霍つハお價うらも
あきく好このむ在あるが十二じふに又鐘かね集あるの反さかるの
池いけをぬるもいし是こゝろを描えく才あが理り屈くがよれれハ
外ほかにハ唯ただ好このむつるれ小魚せうぎよ在ある兒この嬉うれしくも
受うけ取とり心こゝろをたむひの外ほかに若ごとく復また嬉うれしくも
嫌きらむ情こゝろ生な板いた元もと底そこをりぞお仕つか生なりふ三さん度ど夜よよこ夜よ
はと天てん積せきの催もよお使しよ一ひとそるの亦またわきもりつ一ひと牧ままの



